うのか）という視点で研究を進めることは，東南アジア政治の相対化だけでなく東南アジア発の理論的知見を他地域の研究者に発信する可能性にもつながるであろう。この他，比較政治学で使用されている基本用語や定量的な分析を適切に理解していないと思われる部分が本書では散見されたが，そうした点を改善することも東南アジア政治研究を前進させる上で重要であるだろう。なぜなら，同じ学術用語をばらばらな意味で使用していては学術共同体としての知見の蓄積が進まないからである。

日本に暮らす学生や研究者が，東南アジア諸国で起こっている現象を追うだけでなくその他の地域にも目を向け，方法論研究の進展を学ぶことは，時間や研究環境の制約上容易なことではないだろう。しかしながら，東南アジア政治を他地域との比較で相対的・多角的に分析することは，東南アジアそのものをより良く理解することに繋がるであろうし，同時に，より広範囲の読者を獲得することにも貢献するであろう。本書やその他のスタディ・ガイドがより多くの人を東南アジア政治研究にいざなうことを願いたい。

（粕谷祐子・慶應義塾大学法学部）

参考文献

岩崎育夫．2017.『入門東南アジア近現代史』東京：講談社.

Gibson, Edward. 2012. *Boundary Control: Subnational Authoritarianism in Federal Democracies*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kuhonta, Erik Martizez; Slater, Dan; and Vu, Tuong, eds. 2008. *Southeast Asia in Political Science: Theory, Region, and Qualitative Analysis*. Palo Alto: Stanford University Press.

中村正志（編）．2012.『東南アジアの比較政治学』千葉：日本貿易振興会アジア経済研究所.

中野亜里；遠藤　聡；小高　泰；玉置充子；増原綾子．2016.『入門東南アジア現代政治史』東京：福村出版.

清水一史；田村慶子；横山豪志（編著）．2018.『東南アジア現代政治入門』東京：ミネルヴァ書房.

関　恒樹．『「社会的なもの」の人類学――フィリピンのグローバル化と開発にみるつながりの諸相』明石書店，2017，331p.

本書を紹介するにあたって，あとがきに触れることから始めることを，お許しいただきたい。1998年，フィリピン独立100周年を記念するTシャツに「I CAN DO ANYTHING!: I SURVIVED」という文言が印刷されていた，というのだ。100年ものあいだ，スペイン，アメリカ，日本による占領，クーデター，戒厳令，ピナツボ山噴火などを生き抜いた。だから私（フィリピン人）にできないことは何もない！という，フィリピン人お得意のウィットが効いた自虐ギャグである。外からの憐れみのまなざしを吹き飛ばすどころか，尊敬の念にすら変えてしまう力強さ。それはどこから来るのか。著者同様，わたし自身，毎回フィリピンを訪れるたびに魅了されてきた。本書はそれを，人びとがネオリベラリズムの引き起こすリスクに直面するごとに紡いできたつながりの諸相，つまり「社会的なもの」のなかに探そうとする。「社会的なもの」とは，「一方でフォーマルな制度として，他方でインフォーマルな人と人との多様なつながり」（p. 8）であると説明される。

1980年代以降，フィリピンはネオリベラリズムの影響をまともに受けてきた。世界銀行とIMFのイニシアティブによる構造調整は，貿易自由化，税制改革，公共部門の合理化（民営化および金融制度改革），その他の市場指向政策（各種規制緩和）の分野に及んだ［浅野 1993: 293］。農生産物，基本的生活用品，保健サービスなどへの補助金は減らされ，国の歳出の重点は対外債務返済におかれるようになった［Parreñas 2005: 15］。構造調整が労働市場の不安定化，学校教育の質の低下，保健サービスの不足を招き，これらの恩恵を受けていた中産階級を海外労働へと駆り立てたのである［*ibid.*: 22］。

社会を流動化させ，特に貧困層に打撃を与えたネオリベラリズムの負の側面を指摘する研究は多数ある。これに対し，本書が注目するのは，それを生き抜いてきた人びとの生活実践だ。それを理解する枠組として用いるのが「ネオリベラルな統

治性」と「社会的なもの」という概念である。ネオリベラリズムは単なる政治社会制度やイデオロギーだけではなく，人びとの社会関係，アイデンティティ，生存の方法，時間の管理方法などに影響を与える。それにより，ネオリベラルな制度の管理方法やイデオロギーを内面化するエージェンシーを作り出す。フーコーの統治性という概念を援用することにより，著者は，ネオリベラリズムが人びとに作用する権力の領域を捉えようとする。

しかし，その権力の領域に捕らえられた人びとのほうは，単純に権力に蹂躙されているわけではない。ネオリベラルな統治性は，管理と抑圧の装置としての側面を持つが，人びとはその過程で引き起こされるリスクに直面すると，インフォーマルなつながりを活性化させ，新たな関係性を作り出している。そして，フォーマルな制度を自分たちの都合のいいように領有しようとする。

このようにして新しく作り出されているパブリックな領域とプライベートな領域が重なり合う現象を，本書は3部9章を割いて人びとの具体的な生活世界から描き出す。各部の舞台は，第1部マニラのスラム，第2部パラワン島の漁業の町，第3部トランスナショナルな空間（海外労働者）とそれぞれ異なっている。しかし，各部各章に貫かれているのが，ネオリベラルな統治性がどのような主体を形成しているのか，ネオリベラルな政策によりリスクが生じた時，人びとはどのようなインフォーマルな「社会的なもの」を活性化させているのか，それにより，人びとはどのようにパブリックな領域を飼い慣らし，領有しているのか，というテーマである。

例えば第1部では，具体的にはスラムの社会政策としての土地給付事業（第1章）と条件付現金給付事業（第2章）が紹介される。これらの政策は，いずれも特定の秩序と規範に人びとを従わせ，包摂可能な存在として改変しようとする。それはまた，汚職と腐敗の温床であるクライエンテリズムからの脱却を志向したものであった。しかし，人びとはそうした統治を受け入れつつも，その正当性を慣れ親しんだクライエンテリズムのロジックに見い出し領有していく。

第2部では，海洋資源管理制度がエコラショナルな主体を形成していく様が描かれる。一方，資源管理制度への包摂が漁民の間に分断や排除を生み出すと，それを回避するように共同体の規範を作用させる様子が描かれる（第3章，第4章）。例えば，第5章に登場するリトは，権力や合理性への順応か抵抗か，と二項対立の問いを立てて観察しようとする研究者をどこ吹く風と聞き流すように，資源保護のために「不法侵入」とされた漁場で漁業を行うと思えば，一転，エコ・ツーリズムの従業員になったりする。

第3部の4つの章は，さまざまな階層の海外労働者が形成する新しい親密なつながりに焦点が当てられる。海外労働を国策として推進するフィリピンは，深刻な人権侵害が起こるたびに政策を練り直してきた。しかし，結局送り出しを規制することはできず，リスクに対する労働者自身のレジリエンスを高め，フレキシブルかつ競合的な労働市場に適合する労働力を作り出す方向で推進してきた。このような「ブローカー国家体制」が保障しないリスクに対し，世代間，階層間，あるいは階層を超えたつながりが生み出されている。

わたしは，2009年から湾岸アラブ諸国においてフィリピン人家事労働者の聞き取りを行っている。彼女たちは受け入れ国からも送り出し国からも保障されない様ざまなリスクに直面するなかで，アドホックでインフォーマルなつながりを国籍および階層を超えて形成している［石井 2014］。このようなインフォーマルな相互扶助の存在は，フィリピン人労働者だけではなく，インド人労働者のあいだにも認められている［Kathiravelu 2016］。経済のグローバリゼーションとネオリベラルな統治性の浸透のもとでインフォーマルな「社会的」なものが活性化されているという著者の主張には普遍性がある。フォーマルな「社会的なもの」への浸透と再編によって，より包括的な共同体が開かれているとの考察は，近代やオリエンタリストが構築してきた二項対立的な思考を解体することに成功している。

しかしやはり，本章を読んでどうしても気になるのが，新しく形成されているより包括的な共同体から漏れてしまう人びとの存在，すなわち，行

商人メンバーの亀裂が表面化しフォーマルな「社会的なもの」への侵食を諦感するメンバーを抱える「サン・ホセ・アソシエーション」（第1部第1章），フォーマル，インフォーマル両方の「社会的なもの」から漏れ落ちるなかで麻薬に手を出し子どもの目の前で射殺されたメラニー（第1部第2章），そして私立病院の高額な医療費を支払うことができず，混雑していた公立病院で診療時間内に診てもらえず命を落としたネリー（第3部第6章）の存在である。2018年6月，ドゥテルテ大統領は悪名高い麻薬撲滅キャンペーンに加えて，犯罪取り締まりキャンペーンの一環として*tambay*（英語のstandbyから派生したフィリピン語），すなわち路上で無目的にたむろする人たちを取り締まる方針を打ち出した。ドゥテルテ政権の方針は，フォーマル，インフォーマルな「社会的なもの」や両者の相互浸透によって形成される新しい共同体から漏れ落ちる人びとを強制排除していると見ることはできるだろうか。そうであれば，その数はこれからも右肩上がりに増えていくであろう。その帰結はどこに向かうのであろうか。

著者の関心は，より開かれた共同体の形成にある。が，上記のようにそこから漏れ落ちた人たちにもまなざしを向けることも忘れてはいない。一方，新しく再編されている共同体を「ローカルで固有（ヴァナキュラー）な生活世界における生命やモラルの観点から捉え返す」（p. 304）ことの必要性を主張しているのであれば，そこから漏れ落ちた人びとの存在を含めてその意義を論じてほしいと思うことは，要求しすぎであろうか。

本書に描かれている生活世界は，あたかもコラージュのように展開されている。共通するテーマに貫かれてはいるが，全体を一つのストーリにまとめるあげることに，あえて抗っているようにも読める。ネオリベラリズムの統治性のなかで形成されるエージェンシー，そのエージェンシーが形成するのが「不均質で混成的な公共圏」であるからであろう。そうしたエージェンシーが「固定的なものではなく，常にプロセスとして存在する」［関 2007: 13］という視点は，著者の前書『海域世界の民族誌――フィリピン島嶼部における移動・生業・アイデンティティ』（世界思想社，2007年）から引き継がれている対象との向き合い方を示しているように思えた。

（石井正子・立教大学異文化コミュニケーション学部）

参考文献

浅野幸穂．1993．『フィリピン――マルコスからアキノへ』（第2刷）東京：アジア経済研究所．

石井正子．2014．「フィリピン人家事労働者に対する保護への取り組み」『湾岸アラブ諸国の移民労働者』細田尚美（編），122–146ページ所収．東京：明石書店．

Kathiravelu, Laavanya．2016．*Migrant Dubai: Low Wage Workers and the Construction of a Global City*．Basingstoke: Palgrave Macmillan, UK.

Parreñas, Rhacel S．2005．*Children of Global Migration: Transnational Families and Gendered Woes*．Stanford: Stanford University Press.

関　恒樹．2007．『海域世界の民族誌――フィリピン島嶼部における移動・生業・アイデンティティ』京都：世界思想社．

遠藤　環；伊藤亜聖；大泉啓一郎；後藤健太（編）．『現代アジア経済論――「アジアの世紀」を学ぶ』有斐閣，2018，xiv+337p.

ミレニアル世代の若者に，現代アジアの何を教えるべきか。「アジア経済論」の名のもと，大学で教えられている内容に，時代錯誤はないか。これらがこの教科書を通じて著者たちからアジア経済研究者に投げかけられた問いである。

1980年代，アジア経済は開発経済学で語れば事足りた。今や文庫本にさえなっている渡辺利夫の『成長のアジア　停滞のアジア』［渡辺 1985］が，アジアの成長と貧困の両面を描いていた。欧米先進国に追いついていくアジアを叙述することで，アジア経済を教えることができた［末廣 2000］。中国，ベトナム，カンボジア，ラオスも，市場経済移行を「キャッチアップ」と見なして論じることができた。

このキャッチアップ論については，「東アジアの